

カフカの「二つの動物物語」(1)シオニズムをめぐる考察

著者	新田 誠吾
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	24
ページ	41-51
発行年	2008-03
URL	http://doi.org/10.15002/00003019

カフカの「二つの動物物語」(1)

— シオニズムをめぐる考察 —

新 田 誠 吾

1. はじめに

1917年、マルティン・ブーバーが発行するシオニズムの雑誌「ユダヤ人」(Der Jude)に、「二つの動物物語」というタイトルでカフカの2つの短編が発表された。10月号に「ジャッカルとアラビア人」(Schakale und Araber)、ついで11月号に「ある学会への報告」(Ein Bericht für eine Akademie)が掲載された。

カフカは、その短編を含む十数編の作品を「錬金術師通り」(Alchimistengasse)22番地で書き上げた。プラハ城(Hradschin)に近いこの小さな家は、1916年11月にカフカが一番末の妹オットラが借りた。フランツは11月末から翌年4月まで、自宅の騒音を避けるようにこの家に通い、静かに創作にふけた。

カフカは、「八つ折り版ノート」(Oktavheft)と呼ばれる青色の小さなノートを使用していた。「ギムナジウムで『単語帳』と呼んでいる類のノート」(H 438)である。このノートは8冊が現存しており、批判校訂版では編者によって順番にAからHまでのアルファベットが付されている。8冊のノートのほかに、作品を書き込んだノートが少なくとも2冊はあったと推定されている。

1917年4月22日、カフカはブーバーの求めに応じて、自分の書いた12作品をブーバーに送付した。その際、いずれ「責任」という表題の本として出版する予定があることを手紙に書き添えている。

返事が数日遅れましたのは、原稿を清書する必要があったためです。12篇、送付いたします。[中略] この作品すべてと他の作品をあわせて、いずれ全体の表題を「責任」とする1冊の本を出すつもりです。¹⁾ ([] 内は筆者)

新 田

ブーバーは、12作品から冒頭で述べた2作品を選んだ。ブーバーの手紙に、カフカは次のように返答した。

どうやらこれで私も「ユダヤ人」に参加することになりましたが、こういうことはないと思っておりました。どうか作品を喩え話（Gleichnis）とお呼びにならないでください。これは本来、喩え話ではありません。全体の表題が必要であれば、「二つの動物物語」が最もふさわしいでしょう。²⁾（傍点は筆者）

錬金術師通りで書かれた短編は、「責任」という作品集にはならず、カフカ自身の提案で短編集『田舎医者』（Ein Landarzt）として1919年（実際の刊行は1920年）に出版された。

さて、この二つの動物物語にはジャッカル、猿といった動物が登場し、人間の言葉を話すことから、ブーバーが読んだように「喩え話」のようにも見える。しかし、カフカはブーバーに宛てて書いたように、これらの作品を喩え話や寓話として書いたのではなかった。カフカは、「自分の夢のような内面生活を書く感覚」（KAT 546）をはっきりと自覚し、作品を自分の分身のように考えていた。そういう作家にとって、二つの物語は単なる動物物語以上のものだったはずである。当時のカフカが、どのような問題を考え、それをどのように文学作品に結実させていったのかを考察するために、まずカフカがシオニズムにどのように取り組んだのかを検証してみたい。

2. カフカとプラハのシオニズム

19世紀末から20世紀初頭にかけて、プラハのユダヤ系住民は、次第に高まりつつあった反ユダヤ主義にさらされていた。こうした状況のなかで育ったカフカは、自分がユダヤ人であるということを十分に意識していたと考えられる。ここでは、カフカがプラハのシオニズム運動にどのように関わったかを考察する。

1896年、13歳のカフカはユダヤ教の律法にしたがって「バル・ミツヴァ」を祝い、成人男子となった。その同じ年に、ウィーンのジャーナリスト、テオドー

カフカの「二つの動物物語」(1)

ル・ヘルツルの『ユダヤ人国家』(Der Judenstaat)が出版された。フランスの「ドレフュス事件」(1894年)を取材したヘルツルは、ヨーロッパで先鋭化しつつあった反ユダヤ主義を分析し、ユダヤ人問題解決のためにユダヤ人国家建設を提唱した³⁾。ヘルツルは、翌1897年にスイスのバーゼルで第1回シオニスト会議を開催する。

1899年には、ボヘミアで「ヒルスナー事件」が起きる。これは、ボルナ郊外の森で19歳のカトリックのチェコ人女性が殺害されて発見された事件で、23歳のユダヤ人の靴職人レオポルト・ヒルスナーが犯人として逮捕された。ボヘミアやウィーンの反ユダヤ主義のマスコミは、儀式のために血を使うユダヤの「儀式殺人」であると報じ、科学的に立証しようとさえ試みた⁴⁾。この事件は、チェコスロヴァキア初代大統領になるマサリクが冤罪であることを証明し、ヒルスナーは1916年に釈放されたが、それによって反ユダヤ主義が収まったわけではなかった。

反ユダヤ主義が顕在化するなかで、カフカと同世代のユダヤ人の若者は、社会主義かシオニズムかの二者択一を迫られた。すなわち、「階級・国籍・人種・宗教による差別を廃し、それ故、ユダヤ人をも他の人々と共にひとつの大きな家族の中へと受け入れる、全人類を兄弟として包摂する社会主義か、それとも自分たち固有の国でユダヤ民族として再生することを目指すシオニズムか、という選択⁵⁾」である。プラハで特に中流以上の家庭に育った若い世代は、シオニズム運動に傾倒していた。プラハでは、1892年に反ユダヤ主義団体「ゲルマニア(Germania)」が結成されたことに対抗して、翌93年にユダヤ人の学生組織「マッカベア(Maccabaea)」が創設された。「マッカベア」は、99年に「バル・コホバ(Bar Kochba)」に改称する。その代表を務めていたのが、カフカのギムナジウムの同級生、フーゴー・ベルクマンであった⁶⁾。

カフカは、1910年以降「バル・コホバ」を通じてシオニズムに関わっていった。1911年に東欧のイディッシュ語劇団の公演をプラハで観てからは、ユダヤの伝統を積極的に知ろうと努めた。雑誌「世界」のパレスチナの号を持ち、1912年にはアドルフ・ベームの月刊誌「パレスチナ」の予約購読をしていただけでなく、パレスチナ旅行を計画していたほどである。フーゴー・ベルクマンとの論争を始め、「ユダヤ学生クラブ(Verein jüdischer Hochschüler)」の催し物やバル・コ

新 田

ホバ主催の民謡の夕べを聴きに出かけたりした⁷⁾。

カフカがマルティン・ブーバーと出会ったのも、バル・コホバでの講演がきっかけであった。ブーバーは、バル・コホバで1909年から10年にかけて、計3回の講演を行った。ブーバーは、パレスチナに国家建設を旨とする政治的シオニズムではなく、ユダヤ文化、精神の復活に力点を置いた文化的シオニズムの立場をとっていた。ブーバーの講演は、プラハのシオニストたちに衝撃を与え、ブーバーはカリスマ的存在になった。

カフカは、ブーバーの3回の講演のうち、最後の講演（1910年12月）を聞いたと思われる。1913年には、ブーバーのユダヤの神話に関する講演を聞き、プロトら友人とブーバー本人にも会っている。しかし、カリスマであるブーバーに対し、カフカの反応はきわめて冷淡で辛辣だった。それは、フェリスに宛てた手紙（1913年1月16日と19日）からはっきり読み取れる。つまり、カフカはシオニズムに取り組んだものの、ブーバーが提唱していたシオニズムにはまったく共鳴していなかったのである。

ブーバーがユダヤの神話について講演します。僕を部屋から引きずり出すには、ブーバーでは不十分です。以前に講演を聞きましたが、ブーバーは退屈でした。彼の話にはどれも何かが欠けています。(F 252)

昨日、ブーバーとも話をしました。会ってみると、澁刺として飾らず、頭のいい人で、彼の書いた生ぬるい事柄とは無縁の人に思えます。(F 257)

1913年9月、カフカはウィーンで開催された「第11回シオニスト会議」に出かける。労働者災害保険局の出張を利用したものだだったが、カフカはシオニズムとの接点がないことを確認するだけだった。これ以降、カフカはブーバーを含め、シオニズムに対しては距離を置くようになる。

今朝、シオニスト会議に行きました。きちんとした繋がりが僕にはありません。個別の点や全体としては関係はあっても、本当はないのです。(F 462)

カフカの「二つの動物物語」(1)

3. 社会的成功と自己卑下

プラハのシオニズムに接近し、しだいに離れていった1910年代前半、カフカは社会的に認められた人間になろうと努めていた。社会に認知されるとは、財産を築き、結婚して家庭を持つことであった。それは、カフカの両親が息子に強く望んでいたことである。

1848年の「ユダヤ人解放令」によって、ボヘミアの村ヴォセクからプラハに出てきたカフカー族のなかには、社会的に成功を取めた者がいた。父ヘルマンは行商から始めて、売れ行きのよいアクセサリー店を街の中心部に構えていた⁸⁾。ヘルマンの従兄弟には、リキュールの大手製造工場を経営し、後にオーストリア＝ハンガリー帝国の御用商人となった者や、弁護士としてプラハ弁護士会会長を務めた者もいた⁹⁾。こうした親戚を持つヘルマンにとって、息子フランツが社会的に成功を取め、財産を築くことは自明のことであった。そのため、1911年に「プラハ・アスベスト工場・ヘルマン商会」が設立され、フランツが共同経営者として登記された。1917年4月に会社清算の申請がなされるまで、カフカは工場の仕事に半ば強制的に関わることになる。この経営に加わったことがカフカには大きな精神的苦痛となった¹⁰⁾。

結婚もカフカにとっては、重圧となった。結婚とは「家庭を築き、自立すること」(KANII 207)であり、家庭は「およそ人が手に入れるもので最高のもの」(KANII 209)と考えていた。1912年にベルリン出身のフェリス・バウアーと交際を始めるが、1914年7月に婚約を解消する。しかし、同年10月には二人の文通が再開した。

1916年から17年にかけて、フェリスとの結婚は現実のものとなるかに見えた。1916年7月10日には、マリーエンバートのホテルから二人の名前でフェリスの母アンナ宛てに手紙を出し(F 663f.)、再び婚約した。1917年7月27日には、出版社のクルト・ヴォルフに宛てて「私は現在の職を棄て(この職を棄てるのが、そもそも私の一番強い願望です)、結婚し、プラハを離れて、おそらくベルリンに行きます」(Br 158)と書いている。

カフカの苦悩は、両親の過大な期待にあるのではない。自らも望んでいるのに、実現に到らない自分に、苦悩するのである。ナポレオンに憧れていたカフ

カは、ナポレオンの名言集を読んでいることを何度もフェリスに打ち明けている (F 246)。それどころか、結婚に向けてカフカは軍人になることすら実行に移そうとした。1915年には、フェリスに「もし軍人になれば、私の幸せになることがどうしてあなたには分からないのですか」(F 638)と書き、翌年8月27日の日記には「さあ奮い立て。おのれを向上させ、役人根性から足を洗え。そして何になるべきかを計算するかわりに、自分がどんな人間であるかを見ることから始めるのだ。次の課題は絶対に軍人になること」と決意を記している。しかし、この計画も兵役検査に合格しなかったため、実現しなかった。

この自己願望と自己認識の乖離が、結婚の最大の障害であった。結婚を望み、その価値を理解していながら、実際には結婚生活を営むことに心理的抵抗があった。その証拠に、2度目の婚約のためフェリスと滞在していたマリーエンバートで、カフカは「F.と暮らすのは無理。誰かと一緒に生活するのは堪えられない」(KAT 791f.)と日記に記している。婚約の1か月後には、青い学習ノートに独身生活と結婚生活の比較を行なっているが、ここでも結婚生活を否定的にとらえている (KANII 24-25)。

カフカのこうした態度は、卑小な自分に対する自己卑下と不可分に結びついていた。フェリスと最初に婚約した直後、カフカはグレーテ・ブロッホに手紙を書いた。そこに描写されているのは、紛れもないカフカの自己イメージである。カフカがシオニズムや宗教について、どのように自己認識をしていたかという点でも重要である。

生活環境ともって生まれた性格のせいで、まったく非社会的な人間、不安定で、予断を許さない健康状態、シオニストでなく（シオニズムには感心しますが、私は嫌でたまりません）信仰もないユダヤ人であるために、どこの主な共同体からも離れ、オフィスの強制労働のために、その最上の部分が絶えず苦しめられている—そんな人間が結婚という社会的な行為を決心するのです。(F 598)

カフカの「二つの動物物語」(1)

4. ユダヤ人ホーム

前述したとおり、カフカは1913年半ばにはシオニズムに距離を置くようになった。「ぼくがユダヤ人と何を共有しているのだろうか？ 自分自身と共有するものもないに等しいし、生きていられることに満足して、隅の方で静かにしておいた方がいい」(KAT 622)とユダヤに関する関心も薄れていった。

しかし、1916年にカフカは再びシオニズムや宗教について考えを巡らせることになる。第一次大戦によって大量のユダヤ人難民が発生し、婚約者のフェリスが難民のヘルパーとして働くことがきっかけとなった。また、プロートから「ユダヤ人」誌にカフカの推薦を受け、プーバーがカフカと再び接触を図ったことも契機となった。それは、錬金術師通りで「ジャッカルとアラビア人」を含む作品を書き始める半年ほど前の時期に当たる。

1915年1月中旬以降、15,000人の東欧のガリツィアからの難民がプラハに到着した。プラハのシオニストであったアルフレート・エンゲルは学校を開き、2,000人を超す難民の児童の教育を行った¹¹⁾。5月には、ジークフリート・レーマンがベルリンに「ユダヤ人ホーム」を設立した。カフカは、ユダヤ人ホームでボランティアで働こうとするフェリスに積極的に助言を行った。

ともかく、よく知らないシオニズムのために、あなたがユダヤ人ホームを恐れることはありません。ホームによって別の力がうまく働くことのほうが、私には重要なのです。シオニズムは、今生きているユダヤ人の大半が一番端の部分には手が届くでしょうが、もっと大切なことの入口に過ぎないのです。(F 675)

カフカは、ユダヤ人ホームでの教育には限界があると捉えていた。西欧ユダヤ人女性のフェリスとユダヤの伝統のなかで生きてきた東欧ユダヤ人との間には文化的な断絶があると考えていたからである。したがって、ホームのヘルパーの仕事とは、子どもたちを「現代の教養ある西欧ユダヤ人の状態に少しでも近づけること」であり、「東欧ユダヤ人の価値に見合うものは、ホームでは伝えられない」と考えていた。ただわずかな希望として、そうした価値を西欧ユダヤ人が「学ん

で自分のものにできる」(F697) かもしれない。

カフカが西欧ユダヤ人に欠けていると感じていたのは、ユダヤの伝統であり、特に信仰のなさであった。もっとも、20世紀初頭のプラハに住んでいたユダヤ人は、一部の例外を除けば、宗教には関心が低かった。カフカは後年、「父への手紙」のなかで「あなたは年に4回だけシナゴグに行かれましたが、少なくとも真面目に信仰を考えている人よりは無関心派に近く、お祈りも儀式として我慢してやっていただけです」(KANII 186)と父を非難している。しかし、プロートによれば「これはプラハの宗教に対する無関心さであった。特に同世代の間には、漠然としたものしかなかった¹²⁾」。つまりプラハのユダヤ人たちは、東欧のユダヤ人の生活を規定していたハシディズムの影響を受けず、西欧に同化していたのである。

信仰の欠けたシオニストは、カフカには本末転倒に思えた。1916年9月16日のフェリスへの手紙で、「私は、教会堂に行こうとは思いません。教会堂はこっそり入ればすむ場所ではありません。子どものときにできなかったことが、今できるはずがありません」(F700)と書いたあと、続けてこう批判した。

シオニズムのためだけにユダヤ教会堂に押しかける連中は、静かに普通の入口から入るのではなく、契約の聖櫃の後から、聖櫃にかこつけてむりやり中へ入ろうとしているように思えます。(F700)

5. ブーバーの「責任」

1916年3月にブーバーが企画した月刊誌「ユダヤ人」が創刊された。

ブーバーが雑誌の刊行を決意した背景には、ユダヤ人の失われた共同体意識に対する危機感があった。創刊号の「標語」(Die Losung)で、ブーバーはこう書き始めた。

この大戦で、諸国民のなかにいるユダヤの状況は、悲劇的な問題であることが増大し、おそろしいほど明確になった。

数十万人のユダヤ人が互いに戦う。しかも決定的だったのは、強制させら

カフカの「二つの動物物語」(1)

れたのではなく、圧倒的な義務感から戦ったことである。¹³⁾

ブーバーは、西欧ユダヤ人の弱点は、「同化したこと」(assimiliert)ではなく、「個々がばらばらになったこと」(atomisiert)にあると断じる¹⁴⁾。こうした分裂状態を再び統合するために、ブーバーは「責任」(die Verantwortung)という語を中心に据える。

そもそも自己の存在を実現しようとする者は、責任を感じることで共同体への関係を実行に移さねばならない。この戦争でユダヤ人が被った体験によって動揺し、共同体の運命に責任を感じるユダヤ人のなかに、ユダヤの新しい統一はあるのだ。¹⁵⁾

この翌年、ブーバーの求めに応じて作品を送ったカフカは、いずれ作品をまとめ、「責任」という表題で出版する考えを伝えたが、それは明らかにこの標語を意識したものである。カフカは、ブーバーの言う意味での共同体を感じるができなかった。東欧ユダヤ人の共同体とは断絶があり、西欧ユダヤの共同体にも強い帰属意識は持てなかった。それは、結婚に際し、カフカが書いた自己イメージで見たとおりである。カフカは、いわば孤立した状態にあった。

1916年10月、「ユダヤ人」誌の7号に、プロートの評論「我々の作家と共同体」が掲載された。プロートは、「フランツ・カフカは特別な位置を占めているように思える¹⁶⁾」と書き始めた。そして奇しくも「彼の中心テーマ、というか唯一のテーマが孤立した人間である¹⁷⁾」と続けた。カフカは、この評論を高く評価し、「読んでいる最中に、嬉しくてにやにやしてしまった」(Br 248)とプロートに書き送っている。東西を問わず、いずれのユダヤの共同体からも孤立し、信仰もなく、シオニストでもないという認識は、カフカのなかで確固としたものになっていた。カフカは、フェリスに手紙のなかで自分の姿を「二頭の馬にまたがるサーカスの騎手」に喩えた。このように自分を形象化することは、カフカが得意とする手法であった。

マックスの評論「我々の作家と共同体」が次号の「ユダヤ人」誌に載るかも

しれません。ところで、ほくがどういう人間なのか、教えてくださいませんか。「ノイエ・ルントシャウ」誌に「変身」のことが書いてあって、もっともな理由で評価されませんでした。何でも「Kの書き方にはドイツ的なものがある」とか。これに対して、マックスの評論では「Kの物語は今日のユダヤを表した最良の記録の一つ」とあります。

これは厄介です。ほくは二頭の馬にまたがったサーカスの騎手でしょうか？ 残念ながらほくは騎手ではなく、地べたにぶっ倒れています。(F 719-720)

注

カフカの作品、日記、手紙からの引用は、次のものにより略記で示し、ページ数を算用数字で示した。

Br *Franz Kafka. Briefe 1902 – 1924.* Hrsg. von Max Brod, Frankfurt a.M., 1958.

F *Franz Kafka. Briefe an Felice.* Hrsg. von Erich Heller und Jürgen Born, Frankfurt a.M., 1967.

H *Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß.* Hrsg. von Max Brod, Frankfurt a.M., 1966.

KANII *Franz Kafka. Kritische Ausgabe. Nachgelassene Schriften und Fragmente II.* Hrsg. von Jost Schillemeit, Frankfurt a.M., 1992.

KAT *Franz Kafka. Kritische Ausgabe. Tagebücher.* Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley, Frankfurt a.M., 1992.

1) Grete Schaeder(Hrsg.): *Martin Buber. Briefwechsel aus sieben Jahrzehnten.* Bd.1: 1897-1918, Heidelberg, 1972, S.491f.

2) *Ibid.*, S.494.

3) Vgl. Theodor Herzl: *Der Judenstaat. Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage*, Zürich, 1988.

4) Vgl. Hartmut Binder (Hrsg.): *Kafka-Handbuch. Bd.1*, Stuttgart, 1979, S.27.

5) エルンスト・パーヴェル (伊藤勉訳) : 『フランツ・カフカの生涯』

6) Vgl. Binder, S.370-376.

7) *Ibid.*, S.435.

8) アンソニー・ノーシー (石丸昭二訳) : 『カフカ家の人々』 (法政大学出版局, 1992年) p.2-8. 参照。

カフカの「二つの動物物語」(1)

- 9) ノーシー, p.128-132.参照。
- 10) このアスベスト工場の設立がカフカに与えた影響については, 拙稿「経営者カフカー『変身』成立の一考察」(法政大学多摩論集第10巻, 1994年, p.3-19)を参照されたい。
- 11) Ritchie Robertson: *Kafka: Judentum, Gesellschaft, Literatur*, Stuttgart, 1988, S.208.
- 12) Max Brod: *Über Franz Kafka. Eine Biographie*, Frankfurt a.M., 1966, S.246.
- 13) *Der Jude. Herausgeber Martin Buber. Jahrgang 1. Berlin/Wien 1916-1917, Vaduz/Liechtenstein*, 1979, S.1.
- 14) Ibid.
- 15) Ibid., S.3.
- 16) Jürgen Born(Hrsg.): *Franz Kafka. Kritik und Rezeption zu seiner Lebzeiten, 1912-1924*, Frankfurt a.M., 1979, S.149.
- 17) Ibid.